
鉛筆は戻ってくる(ホラー)

pumpkin-the-jackmen

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉛筆は戻ってくる（ホラー）

【Nコード】

N5366I

【作者名】

pumpkin-the-jackmen

【あらすじ】

念願の高校に入った、上越修也と明智桃

充実したスクールライフを送るはずだった彼らはこの高校に入ったことに後悔する。

そして惨劇は始まる…

全ては動き出す

初めに

この小説は怖い話です。苦手な方の閲覧はご遠慮下さい。

この小説はフィクションです。

この小説を見て何らかの障害に陥ったとしても、執筆者は責任を負いかねます。

又、流血シーンが多々あるので、苦手な方はご遠慮下さい。

以上の条件をよくよく読み、理解のうえでの閲覧を御願ひします。

2

鉛筆は戻ってくる

夕暮丘高校

一見、とても良さそうな名前に見える。丘から夕暮れが見えるからでしょ？大抵の人はそう思うだろう。しかし、違った。

そんな甘っちょろい事では無かった。此処からの話は私が友人に聞いた話しを物語りにしたのである。この話が風化されないためにも

「……………」

生徒達は黙々と字を書いている。今時の学校のように、ペチャクチ

ヤと喋っているものは一人もいない。
この状況は鐘がなるまで続くのだ。
それは、修也にとっては一日を過ごす中で最も苦痛な時間だった。

上越修也 17歳

高校2年生である。ルックスも中々だし、芸能プロに誘われたのも一度や2度ではない。昨年、念願を果たしたかのようにこの学校へ入ってきた。親も当然そこが一番良い学校と信じ、
修也は小学一年生になってやっと物事を考えるようになり毎日「此処へ絶対に行け」と命じられてきた。

それが昨年に叶ったのだ。親は前のようにガミガミ言うことは無くなった。だが、今度は修也が荒れてきた。
此処は偏差値こそ高いが奇妙な噂がたっているのである。

これを聞いたときには流石に修也も驚いたが、もうそれは後の祭り。時既に遅し。修也はもうこの学校に、
入学してしまったのだ。

これは人生最大の不幸と言っても良いのではないかと修也は思っていた。

同じ頃、明智桃は講堂を歩いていた。
勿論、友達と喋りながら歩いているわけではない。そんな事は断じて許されない。いや、許さない。

校則で決まっているわけではない。では何故喋らないのか？

何故この学校の人間は喋らないのか？

この問への答えは毎回決まっている。それも、あの噂が原因だった。

これは、明智桃と上越修也が夕暮丘高校に入って一週間経った頃。
全員の靴箱の中に同じ内容の手紙が入っていた。

の君達へ告ぐ

丸宮から新入生

この学校でのお喋りは一切禁じる。破ったものは即刻死となる。

ただし、君たちがこの呪縛を解く3つの方法がある。

・この私を見つけて殺すこと。

・鉛筆を捨てること。

・自分の右腕を切り落とし僕に捧げる事。

無茶苦茶かも知れないが本当の事だ。信じて欲しい。

それと健闘を祈る。

丸宮から新入生の

君達へ告ぐ

こんな手紙ともう一つ鉛筆が入っていた。

ごく普通の鉛筆に何があるのか？修也達はこんな事嘘だと笑い飛ばしたが真に受けた者達もいた。

中には啜り泣く様な呻き声も聞こえた。

そして、その後の数分間は何も喋らなかつた。いや、喋れなかつた。喋ったら死ぬと言われたら喋る気にもならない。

「あーもう何で俺達がこんなめに合わなきゃならねえんだよ！！」

大きな声が教室の後ろから聞こえてきた。その声の主を見たとき、初めて分かった。

豪陀達也だ。

豪陀は中学校時代に不良の番町的存在となり、その知名度は一都に及ぶほどだった。

勿論、強い。とにかく強い。僕達が何人束になろうとも倒せない。

豪陀はかなりいらついていた。僕は逆鱗に触れぬようになるべく離れた。

「なんだこんなの！！俺がこんな奴ぶつ殺してやる！！」

そう言つて皆の冷たい視線を感じながら豪陀は教室から出た。

「っ！！何だよ畜生！皆ノリが悪いな！！」

豪陀はぶつぶつと悪態をつきながら食堂に向かった。

その時手に違和感を感じた。不思議に思い右手を開いてみる。すると、

手からは赤い生暖かい血が滴っていた。

豪陀は凍りついた。

しかし、それが自分の血ではないと悟ると薄ら笑いを浮かべた。

「フン！誰だかしらねえがこんな事でまいる俺様じゃないぜ」
その様子を柱に隠れながら凝視している者がいた。

「……………フン…コンナモノハジヨノクチダ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5366i/>

鉛筆は戻ってくる(ホラー)

2010年10月28日05時32分発行